

# 私はこんな風に使っています! 石灰窒素

石灰窒素は誕生して百有余年、永年にわたり沢山の方々にご愛顧いただいておりますが、時が移り行くなかで石灰窒素の効能や効果的な使い方が忘れられてきているように思われます。そのなかで読者の皆さまから「石灰窒素の使用事例を知りたい」などのご意見が多数寄せられました。

弊会では、多くの使用事例を紹介するため、会員各社から取材の協力を得ながら最近の使用事例を紹介することで要望に応えたいと考え、本コーナーを設けました。どうか一読いただき、石灰窒素の多機能ぶりをご理解いただければ幸いです。

末筆になりましたが、寄稿いただきました皆さまに心から感謝申し上げます。

(日本石灰窒素工業会)

## 農家の石灰窒素使用体験記

### 石灰窒素は畑へのご褒美です!

北海道大空町 魚石さん

魚石さんは、大空町女満別の転換畑8haで小麦、直播ビート(てん菜)、大豆、菜豆を栽培する畑作農家です。北海道では規模の小さい経営といえますが、それだけに「畑をキレイにしたい」という信念のもと、創意工夫により長年、安定した経営を築いてきました。本人によれば「キレイな畑」とは、雑草がなく、生育旺盛で多収をねらえる畑のことだそうです。

そんな魚石さんが石灰窒素を使うようになったのは、26年産秋小麦が13俵/10aと多収になったことがきっかけです。これまで麦稈はロールにして酪農家に引き渡していましたが、あまりの麦稈量に「もったいない」と感じたそうです。そこで、魚石さんは普及センターに相談して石灰窒素で腐熟させ、畑に有機物として還元することにしました。石灰窒素は麦稈量を勘案して50kg/10aとし、8月12日に施用して



ビートを手にする魚石さん

麦稈とともにすき込みました。さらに8月28日には緑肥えん麦を播種しましたが、その際、ロータリーに麦稈残渣による引っかかりがなく、腐熟が十分進んでいることを実感したそうです。緑肥えん麦は順調に生育し、10月末にすき込みました。

この圃場には今春、直播ビートを作付けしました。6月までは近隣の移植ビートより出遅れていたものの7月には追いつき、取材時点(9月1日)では明らかに6~7t/10aの高収(通常直播は5t程度)が見込めるまでに根が育っていました。

「昨年、稼いでくれた畑にご褒美として石灰窒素をやったことが効いています」とのコメント。さらに、27年産秋小麦の収量も15俵/10aで過去最高とのこと。収穫後の圃場には、既に石灰窒素が50kg施用され、麦稈がすき込まれていました。

(記: デンカ株 江川厚志)

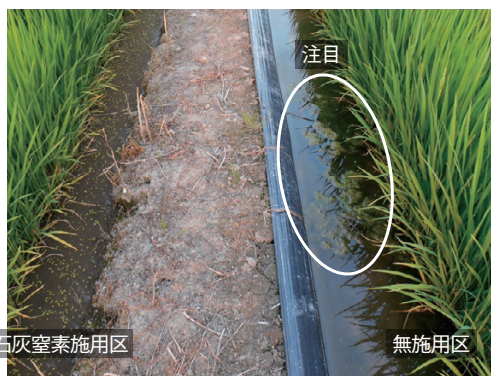
## 石灰窒素を稲わら腐熟に使ってみました!

山形県米沢市 佐藤さん

私が住んでいる山形県米沢市では、稲わらはそのまま水田に放置され、春にすき込まれるのが普通です。

本来は、秋耕してわらを土と攪拌し腐熟を促せばよいことはわかっているのですが、稲刈作業の忙しさと収穫が終わった安堵感から、その後の作業は行っておらず、融雪が遅れた場合、春作業に支障が出ることもあり、秋耕は実施されないのが実情です。

8月5日撮影



石灰窒素を施用した水田では「わき」がみられない

昨年秋、大豆に肥料「黒ひかり」(石灰窒素系複合肥料)を使っている関係で、「石灰窒素」の秋施用と浅耕をメーカーから勧められ、ダメモトのつもりで20 aに施用してみました。耕深は約10cmです。

今年は、田植え以降、高温で雨が少ない気象だったため、「わき」が多発しました。

ところが、驚いたことに石灰窒素を施用した水田では「わき」がみられませんでした。長年、稲をつくっていますが、初めての経験です。実際、雪解け時点で隣の水田のわらと比較しても、わらの腐熟の差がはっきりわかりました。

米沢でも石灰窒素の効果が確認できたので、組織構成員にも周知して、施用を進めていきたいと思っています。

(記：デンカ(株) 杉田邦明)

## 稲わらすき込みで石灰窒素を30年以上使用

長野県立科町 宮澤さん

北に浅間山、南に蓼科山を望む長野県北佐久郡立科町で、宮澤善一さんは稲わらすき込みで30年以上にわたって石灰窒素を使用しています。

宮澤さんが石灰窒素を使うようになったのは、20代の頃に奥さまの実家から石灰窒素の話聞いて、自分も使ってみようと思ったのがきっかけです。それからは、毎年欠かさず石灰窒素を使用しており、食味がよく、増収しているとのこと。

立科町の平均反収は約660kgですが、宮澤さんは1割増しの720kgの収量があるとのこと。また、収量が多い割には倒伏しにくいと感じおり、石灰窒素を使うと茎が丈夫になって、転びにくい稲姿になり、「いもち病」も出にくい感じがして、気に入って使っているそうです。

「石灰窒素の施用量は20~22kg/10 aで、稲わらが十分に腐熟しガスの発生が少ないため、稲の生育が良好になるのだと思います。また、土壌は粘土質ですが、稲わらをすき込んでいるため軟らかくてホクホクしており、そのうえ乾いても硬くならないので、トラクタの運転がスムーズになる効果があります」と宮澤さん。

収穫した「コシヒカリ」は、近隣のホテル向けに出荷しており、食味がよいと好評だそうです。

コンバイン+乾燥機が主流のなか、宮澤さんは「はぜ掛け」でお米をつくっており、手間を惜しまない真面目な宮澤さんの人柄と蓼科山の水、立科町の気温の寒暖差、そして石灰窒素が美味しいお米づくりを後押ししていると思いました。

(記：片倉コープアグリ(株) 坂井政樹)



石灰窒素を30年以上使用している宮澤さん